

【翻 訳】

ウォルター・ドウ・ラ・メアー詩集
『ピーコック パイ』(その2)

野 口 忠 男

やどりぎ

やどりぎの下に座っていると
(薄緑の妖精のやどりぎ)
残りのろうそくが一本短くなって燃えている
眠くなった踊り子たちは皆帰えり
たった一本のろうそくが燃え続けている
影がいたるところに潜んでいる
だれかがやって来て 私にキスしてくれた

私は疲れていた
やどりぎの下で居眠りを始めた
(薄緑の妖精のやどりぎ)
足音も聞こえず 声もなく ただ
うとうとしながら独りぼっちで座っていると
静かな薄暗い空から
見えないように唇が近づいてきて――
私にキスしてくれた

なくなった靴

かわいそうなおさないルーシー
誤って

ダンスをしていた時に
片方の靴をなくしてしまった
階段にもない
玄関にもない
夕食の時に
座ったところにもない
彼女は庭を捜した
でも見つからなかった
鶏小屋 犬小屋
高い鳩小屋
酪農場 牧草地
それから森を捜しても
ルーシーの靴は
まったく見つからなかった
小鳥もうさぎも
おぼろに光る月も
靴の行方を
教えてくれなかった
静かに 静かに！と
フランス語 オランダ語 ラテン語
それにポルトガル語で
鳴き叫んでいた
船に乗り黒い海を
進んで行った
でもルーシーの靴のことは
誰も知らなかった
それでもルーシーは
絹と皮の靴をはき
雪や砂や小石の上を
どんな天気の日にも走って行く
スペイン アフリカ
ヒンダスタン

ジャワ 中国

それから日の照る日本

草原や砂漠

ルーシーは飛んで行く —— 飛んで行く

ペルナンブコから

黄金のペルーへ

山や森を越え

川を渡り

世界中どこまでも

なくなった靴を捜しに飛んで行く

怠け者

私は心臓が弱いため

悲しいことは思い出せない 陽気にもなれないから

魔法の消えた

幼い世界の子供たちについて短い歌を歌おう

四月までまばらに咲く桜草

大きな銀河の星くずは

魔法の消えた

大勢の子供たちの数には及ばない

きんぼうげの咲く緑の草原

雪のように白いさんざしの花

魔法の消えた

たくさんの子供たちはこれらより美しく見えない

月光をあびながら打ち寄せる波

小枝に寂しく止まっているあほう鳥

魔法の消えた

子供たちに涙を流しても無駄なことだと分かっている

涙を流しても無駄なこと 静かな夕べ
灰色の空に星がきらきらまたたく時
魔法の消えた
子供たちの声が 遠くでこだましているような気がする

海の子

ピーターは——誰もいない——
砂浜を歩いた
月がこうこうと輝く間ジグを踊った
たった一人で踊った
波がつま先で飛び散った
ピーターは髪をたらし
リドル カム リーの歌を歌った
月の光が海の泡とあぶくに反射していた
こちらで踊り あちらで踊り
くるくる回った
星のように輝く波が
寄せては返した
どんぐりのように裸のまま
木の実のように裸のまま
鼻とつま先とひざを突き出し
海の子ピーターは踊り回り跳ね回り
リドル カム リーの歌を歌った

いちご

老婦人が
ウィーブからウィクキングへかけて
いけがきの黒いちごを摘みに
出かけて行き
かごに半分摘み取った——

半分摘んでやめると
妖精が緑のほら穴からひょっこり現れ
言葉をかける「ねえ ジル
もっとたくさん摘みたいでしょう？」
するとジルはおじぎをし
摘みたそうな素振りをする
「急いで行きなさい」
と妖精はジルに言葉をかける
「草地を越えて 細い緑の小路へ行きなさい
すると農夫グリムスの
干し草畑へ出ます
私はあそこのいけがきで
何度もいちごを摘みました
鈴なりになっています
ジル 約束してもいいですよ
本気で摘めば
夕食の前までに一杯取れるでしょう」
妖精はきらきら光り輝き
ていねいにジルへ語りかける
ほら 見てごらん！
妖精は空中へ消えて行った

まちがないと確信すると 年老いたグディは
すぐに急いで
草地を越え
農夫グリムスのところまで歩いて行く
小枝から堀にかけて
実をたわわにつけているいけがきのいちごのように
女王様もこれ程たくさんの宝石は
持っていない
オランダ人の金箱みたいな
果実 いばら 花——

どれも皆ウィルソンさんや
メリーさんの田舎家のように
光り輝いていた
それからまちがわずに グディバあさんは
ウィーブへ戻って来た
籠を持っていたために疲れ果て
はうことも出来ないほどだった
夕暮に
我家の戸口へ着くと
いちご摘みから帰ってきたので
愛犬タウザーは
とても喜び
今までしたことがないほど
尾を振っていた
朝となり
空が白らみ始めると
炉の上でなべが
煮え立っていた
なんでもかんでもごたまぜにして
とろ火にかけてぐつぐつ煮た
タウザーとジルは
砂糖と
妖精のところからもいできた黒いちごを
なべに入れぐつぐつ煮こんだ
シロップやゼリー
黒イチゴジャムを作るために
ジルはそれを
12個のすてきな小つぼに入れ
小さなつぼに
1インチのつぼに入れ
親指ぐらいの穴を掘り
ウィクキングからウィーブの間に隠してしまった

地面に足をつけないで踊る

三人の愉快的農夫が
ある時一ポンド賭けた
地面に足をつけないで
踊ることに

三人は急いで上着を脱ぎ
さっぱりすると
めいめいが
靴をはいた

いち —— に —— さん！ ——
で始めると
速くなく
遅くなく
昼のにれの木陰から
日の照る場所へ
草地を越えて行く
ひざを上手に折りまげ
指を動かし
踊りながら
教室を通り過ぎた
丘を登り丘を越え
ぐるぐる回り
三人はカチカチ音をたてながら
教区へ向って行く
タップマンの牧場まで行けば
一マイル踊ったことになる
とんとんとんと
三段の踏越し段を上がった
それからまっすぐホイットパムを横切り

ダンヒルからウィークまで行った
足の運びも軽やかに
それでもあまり急がずに
草原を登りウォッチェットへ
それからワイを通り抜け
七つの立派な教会を
跳ねながら通り過ぎた ——
七つの立派な教会
五つの古い水車場
谷間の農家
丘の羊の群れを通り過ぎた
老人の畑
死者の池
三人が踊ってウールを抜けるころ
すべてのものが遠のいていった
ウールを過ぎると
眠そうに回る
こまのように
三人は夢心地で踊った
しなやかに —— たくみに ——
軽やかに —— みごとに ——
古い時計のように
三人の足は進んだ
一リーグまた一リーグ
また一リーグと進んだ
それでも誰も疲れない
誰も息切れしない
ほら 見てごらん！
ウィロー カム リイを過ぎると
大きな緑の海が
水をたたえて広がっていた
農夫ベイツが言った

「へえへえ息が切れる へえへえ息が切れる
海の水の底には何があるのかな
それは誰にもわからない！」
農夫ジャイルズが言った
「私も息が切れる
良い人が溺れると
遠くへ流される」
でも農夫ターヴィーは
つま先でグルグル回りながら
ゲートルを巻いた足を上げ
どンドン進んで行く
海の底では人魚たちが
海緑色の昼に
豎琴をかき鳴らしている
美しいひれを動かし泳ぎ
黄色の髪を
くしげずっている……
ベイツとジャイルズは——
小石に腰をおろし
ターヴィーのふわふわ浮いている
帽子を見ていた
だが さざ波も
あわも
彼が金の皿で
ご馳走を食べているところは
教えなかった
うたげや踊りや
歌は
海のかなたまで伝わらなかった
二人は大声で呼んだ——呼んだ——呼んだ
返事はなかった
さざ波がたてる砂まじりのため息のほかには

何も聞こえてこなかった
そこで二人は黙って静かに座り
家と床のことを
ぼんやり考えながら
やっと二人は立ち上がりこう言った——
「ダーヴィーよ お前が深く青い海の底にいないなら
どこにいるのかね
おれたちにはわからないし見当もつかない
だが賭けた銀貨は——
喜んでやりたいのだ——
おれたちは
40シリング支うよ
ターヴィー ほんとうに
つつがなく
おまえはおれたちを堂々と
地面に足をつけないで
踊らせてくれたのだから」

ロビンの城の盗賊

ある夜ロビンの城へ盗賊がやって来て
木によじ登り
枝に頭をもたせて座っていると
不思議な光景が目に入った

ロビンはろうそくをともして
妻と二人のかわいいおさない子供たちと
食卓を囲み夕食を食べていた
彼らはピロードの服を着ていた

一人一人にぴかぴか光る皿が用意されていた
何ポンドもする銀の皿

金箔の皿 あふれるばかりのワインのグラス三つ
テーブルの角に置いてあった

肉のおいしく焼ける香りが
枝まで伝わり消えていった
食いしんぼうの盗賊は 夜の空気をかいでいた——
おなかが空いていた

皆が指とスプーンをせわしく動かして
食べたり飲んだり笑ったり話したりするのを見ていた
三人の腕の立つバイオリン弾きが
赤い服を着て音楽を奏でていた

盗賊は月が低くなるまで
ホシムクドリのように木の上で待っていた
城壁の窓から明かりが消えると
こっそり中へ入っていった

ロビンと彼の妻は眠っていた
若くて美しい子供たちも眠っていた
彼が階段を登って行くと
ロビンの飼っているハウンド犬が 温かい犬小屋からほえ立てた

誰もかれも眠っていた 小姓 バイオリン弾き
料理人 皿洗い すやすや眠っていた
彼が階段を登って行くと
ロビンの馬が 馬小屋からいなないた

海の上にかかる月が
弱い青白い光を彼に注いでいた
彼は(銀箔の)皿を
三十三枚数えながら袋に入れた

スプーンを六十本 すてきな黄金のグラスを
一つ除いて四つ詰め込んだ
仕事が終わる前に 六個のすばらしいキューピットの装飾を施した
三枝状の燭台を詰め込んだ

戸棚にお金の入った袋を七つ
ろうそくの火消し具二つ 深皿一枚見つけた
それには魚のように鋭った形の
大きなざくろ石がちりばめられていた

それから彼は抜き足差し足で寝室へ入った
そこではふさ飾りのついた枕をして
夏の日に疲れた
ロビンと彼の妻がすやすや眠っていた

盗賊は薄明りの中で
宝物を見つけ出す
櫛 ブローチ 鎖 指環 ピン 締め金
ごちゃごちゃの宝物

透明な水晶にはめられた
ひらたいらんごの形をした時計
かちかち音のする時計の止金はずし
ポケットに入れた

安びかものをテーブルの上に積み上げた
小さな装身具 小さな装飾品
真珠 ダイヤモンド サファイア トパーズ オパール ——
すべて袋の中へ入れた

夜の薄暗がりの中で ロビンは
山の熊を狩る夢を見ていた

彼の妻はすやすや眠り

欲深い盗賊のことなど気がつかなかった

飢えている盗賊は さらに高く登って行き

小さな寝室へこっそり入って行った

かわいそうなロビンのかわいい子供たちが

愛らしい顔して眠っていた

おお 彼らの髪は黄金の盃より美しかった

彼らのほおが遠くの銀器に映り輝いていた

敷布の上に投げ出された小さな手を見て

盗賊の残虐な心が動いた

ところがたちまち彼の残虐な心はひるみ

すぐに二人を捕らえ

袋の中に押し込むと

こっそり降りて行った

スプーン 平らなはち 杯 皿 小さな装身具

二人のかわいい子供たち

ちりんちりん かちんかちんと音をたてながら

びくびくおびえ まごついていた

彼は階段を降りて 中庭に出て行き

休まずに

靴下留めをしっかりと締めると 深く息をして

風のように走り去った

森 川 山 川 森を過ぎ――

一晩中走り通した

朝になるととある国へたどりついた

彼の悪人顔を知る者は誰一人いなかった

山 川 森 川 山を越え——

盗賊はやせた足して走りに走った
夕方に息たえだえになって
暗い家の門をたたいた

小柄な女中が出て来て 用件を尋ねた
そこには靴直し屋が住んでいた
女中は盗賊のさげてきた袋が気に入らなかった
人相の悪い男を家に入れた

盗賊は靴直し屋に宿を借りる話をする
疲れはてた背中から
ゆっくり袋をおろした——
真夜中に見張る者も聞き耳をたてる者もいなかった

盗賊はおさない子供たちにお父さんと呼ぶように教えた
盗んだ宝物を売り払い
悪い心を和らげるため
宮殿 馬 奴隷 くじゃくを買った

子供たちは盗賊が好きになれなかった
彼は思いもよらぬ程金持ちになった
ロビンと彼の妻はデルフとピューターが心配のあまり
なげき悲しみ日々を送った

未亡人の野の草花

貧しい年老いた未亡人が
庭に野の花の種をまいた
浅すぎず深すぎず
春がやって来た——ぼた——ぼた——ぼたと
五月が金色に輝き すぐに

木立のように緑豊かに葉の茂る六月となった
今はすっかり夏となり 彼女は座って縫い物をする
そこには ヤナギソウ ヒレハリソウ ウシノシタグサが風にゆれ
ナベナ ヨモギギク ホザキノシモツケ
センノウ ホソバウンラン コウゾリナ
茶色いラン 釣鐘草
クローバー ワレモコウ タチジャコウソウ
彼女は香りをかいでいる
オペロンの草地のように 彼女の庭は
夜明けから夕暮まで蜜蜂がまどろんでいる
彼女は涙を流すことはない 時々ため息をつき
きらきら輝く茶色の目で庭をのぞき込む
彼女のものはすべてみな彼女に必要なもの——
貧しい年老いた未亡人の野の草花

えんとつそうじ！

煙突のように黒い彼の顔
象牙のように白い彼の歯
真ちゅうで補強した荷車に乗って行く
車の下に栃の実が光っている

「えんとつそうじ えんとつそうじ！」と彼は叫び
笑い顔してあちこち眺め
薄青色の目を輝かせては
客を探そうとする

ひとたび家の中へ入るとしゃがみ
さおを上まで高くさし込んで
朝の空に向って
すすけたブラシをくるくる回す

それからすすで一杯の袋にうもれ
皆が眠っているうちに
小さな荷車にまた乗って行く
しわがれ声で「えんとつそうじ!」と叫びながら

マックイーン夫人

円窓のようなガラス窓と
緑のよろい戸のある家で
マックイーン夫人は
石炭をたいて生活している

6時に目を覚ます
9時にシナノキに
彼女のともす明りが
突然輝き始めるのが見える

9時半になると
物音一つ聞えない
明るく輝く月が
空をゆっくり進んで行く

あるいは遠くでほえる犬の声
あるいは眠気を誘う巢の中で
さえざる小鳥が
暗がりの中で元気に飛びまわる

かなたの海から聞えて来る
とどろきのように
シナノキの中に
しーっ!と長く引き延ばされた声が響く

小さな緑の果樹園

誰かがいつもあそこに座っている

小さな緑の果樹園に

日が高く登り

午後の空に雲がなく

かすかに羽音をたてながら

蜜蜂がばらからばらへ移るころ

人影があそこに座っている

小さな緑の果樹園に

黄昏がやさしく迫るころ

小さな緑の果樹園に

灰色の露が降り

花のがくを満たすころ

最後にくろうたどりが

「なんだ——なんだ！」とさえずり行ってしまうころ——しーっ！

私はやさしく呼ぶ声を聞く

小さな緑の果樹園で

私はあそこにいるのはこわくない

小さな緑の果樹園に

そうだ 月が明るく輝いて

さみしい光を注ぐ時

蛾が幽霊のようにやって来て

つのあるかたつむりが家からはい出す時

私はあそこに座り ささやきながら耳を澄ましていた

小さな緑の果樹園に

あそこで気配がするのを感じられるのは不思議なこと

小さな緑の果樹園で

あなたが色をぬり 線を引き

穴を堀り 槌で打ち 斧で切り のこぎりを引こうとも
あなたが一人きりになり
静けさが訪れて来ると……
誰かがあそこで待っていて見つめている
小さな緑の果樹園で

かわいそうなミス セブン

一人寂しく横たわる
かわいそうなミス セブン
地面から五つの急な階段を登ったところ
上から一つの階段を下ったところ
黒い髪と濃い茶色の目をして——
悲しまないように努めている
それでも——やはり一人寂しく横たわる
かわいそうなミス セブン

一日中彼女は外を眺めて過ごす
かわいそうなミス セブン
四月のデボンの
甘い香りの果樹園ではなく
のっぺりした四つの壁を見て過ごす
暗闇が影のように迫って来る
月も出ていない 星も出ていない ああ
いるのは私だけ！
かわいそうなミス セブン

それから再び目を覚ます
かわいそうなミス セブン
冷たい夜に にがい薬を飲むために
悲しい夢を忘れて
夢を見ないで心地よく眠ろうと

しばらく努めてみるがなかなか出来ない
かわいそうなミス セブン

そこで思い出を静かに口ずさむ
かわいそうなミス セブン

愛と平和と

喜びの歌

きれいな花や小さな翼

やさしく愛しいものすべて

希望に乗って彼女の胸へ訪れる ——

幸せなミス セブン

サム

サムが思い出にふけるとき
それは海がエメラルド色に

白い泡となって果てしなく

碎ける場面だ

サムは語る —— 小さな茶色の目で私を見つめて ——

「眠らずに

月明かりの晩に 窓から身を乗り出し

大波が碎けるのを眺めていた」

白波がたつたびに

五十万もの小さな手や目が

霜がきらきら輝くように

月に向って踊り飛び散っていた

星がまたたき

満ちた海を眺めていた

辺りには一隻の船も見えず

ただ海と私だけだった

父さんのいびきが聞こえた

一度 荒波にもまれ 月の光がまだらに光る波の中から

人魚が水中にもぐるのを確かにこの目で見た
人魚は頭と肩を波の上に出し
髪を前へ後ろへくしけずりながら
二つの目でこちらをちらと見て
私を呼んだ「サム！」—— 静かな声で—— 「サム！」と……
でも私は……私に行こうとしなかった
誰か他のものを呼んでいると
自分に思い込ませるようにして
人魚はそこに驚くほど愛らしい姿で座っていた
夜通し歌いながら
全てはあの人気のない入り江の
寂しい海でのことだった
「たぶん」と言って 彼はひげのはえてない口もとをなでつけた
「たぶん あれが今なら 坊ず
『サム！』と呼ぶ声を聞いたら
朝には私はいなくなっているだろうな」

アンディの戦い

昔若い船乗りがいた ヤッホー！
意のままに小島へ向けて出航した
桃色の珊瑚と椰子の枝がそよぐ
蛍が夜を昼に変える
— ヤッホー！
蛍が夜を昼に変える

イルカ号は大嵐の中を進んでいった ヤッホー！
浜に捨てられていた三人の船乗りを乗せて
ポーティンゲール達は 彼を砂糖きびの茂るところへ連れていった
いつまでも彼らの奴隷にするために ヤッホー！
いつまでも彼らの奴隷にするために

母と弟のためにマスカット銃を持ち ヤッホー！

ヒョウが静かに歩く森の中で

彼は無気味な人食い人種と戦った

オランウータンが真昼に恐怖で震えている

ヤッホー！

オランウータンが真昼に恐怖で震えている

今や長い苦しみでやせこけ すっかり悲哀のためにやせ細り

食事仲間の親しい猿と一緒に

彼は舐む雪にくるまり 十字星の下に座る

彼は悲しい最期を待っている

ヤッホー！

彼は悲しい最期を待っている

老兵士

年老いた兵士が我家の戸口にやって来た

一切れのパンを求め 他には何も求めなかった

戦争のためやせこけていた

あらゆる所で戦い進軍した

ホル ロル ドル ロル デイ ドゥー

鼻は突き出し ほおはこげ

あごひげがもじゃもじゃ生えていた——

弾薬や弾丸や負傷や太鼓が

老兵士のもとへやって来た

ホル ロル ドル ロル デイ ドゥー

五月が蕾をつけ 小枝から花が咲き出す

甘く新鮮な季節だった

老兵士は夕食を取りながら

朽ちない青春の歌を陽気に歌った

ホル ロル ドル ロル ディ ドゥー

服はぼろぼろにすり切れ 体はすっかりやせ細り
腰のベルトは深く食い込んでいた
老兵士はやつれた白髪混じりの頭をもたげ
同じ言葉を言った——

ホル ロル ドル ロル ディ ドゥー

一枚の絵

船慣れた水夫が一人
ぐらぐら揺れる宿屋へやって来る
看板の青銅の文字がかすみ
夕方の黒い影が忍び寄るころ

太い足に頭を載せ 羊の番犬が眠っている
羊飼いは身をかがめ見はっている
あひるの群が大將の後を 家路に向ってよたよたついて行く
大かえでの下を

水夫の顔はきつね色に日焼けしている
包みは深紅色
宿屋におおいかぶさるように茂る大枝は緑色
遠くの牧草地は青色

水夫の一切れの堅いパンやビールやチーズ
ジョッキやデカルト焼きの大皿
家路へ急ぐ羊飼いと番犬を 明るく照らす三日月は
画家が秘密にしているもの

小さな年老いたキューピッド

そこはとても小さな庭だった
小道は石で出来ていて
木の葉が散らばり
苔むしていた
小さな年老いたキューピッドが
木の下に立ち
小さな壊れた弓を手にして
私をいろいろとしていた

いばらの中の野ばらが
雑草の上にかぶさり
空中に
種がふわふわ浮いていた
小さな年老いたキューピッドが
木の下に立っていた
小さな壊れた弓を持ち
私をいろいろとしていた

鳩小屋は倒れていた
泉は渴き
果樹園の風は
ささやきながら通り過ぎていった
小さなキューピッドは
木の下に立っていた
小さな壊れた弓を持ち
私をいろいろとしていた

ダビデ王

ダビデ王はかわいそうな人だった

彼の悲しみには理由はなかった
百の堅琴でかなでる音楽を必要とした
自分の憂うつをいやすために

奏者は音が出なくなるまで奏でた
奏でた——美しく奏でた
しかしダビデ王の心につきまとう悲しみを
鎮めることは出来なかった

王は起き上がり 一人で
月明かりをたよりに庭を歩いた
糸杉に身を隠していた小夜啼鳥が
わけのわからない言葉で鳴き続けた

ダビデ王は悲しそうに
暗く枝のはびこる木に目を注いだ——
「私に話してくれ 汝歌う小鳥よ
誰がお前に私の悲しみを教えたのか？」

だが小鳥は少しもかえりみなかった
月の冷たさに触れながら
王は小夜啼鳥の哀しみに耳を傾けた
悲しみが全て消えてしまうまで

古い家

私はとてもとても古い家を知っている——
いつもたくさん人が入って行く
葉のおい茂る
さびしい静かな小屋を通り過ぎて行くと
のっぺりした壁があり 戸がある
誰もかれも入って行く 出て来る者は誰もいない

声はすこしも聞えない
入口の光景をひきたたせる
明かりはない
空に高く輝く夕暮の星が
さびしい空を明るくする
一人また一人
古い家に入って行く

直立

ライオンは体をかがめ四つんばいになり
機嫌の悪い熊と歩いて行く
でも人は地面にまっすぐ立ち
頭を上げて歩いて行く
天から吹く自由なかぐわしい風
高みから注ぐ日の光が
人が歩いて行くと
きれいな輝くほおと額をなでて行く
すべての家の玄関は入れるように
アーチ形になっている
四足の獣よりも意気高らかに
背を伸ばし あちこちへ歩いて行く

ほとんど見えない

ほとんど何も見えない
空洞の穴の中で
四つの爪をしたもぐらは
虫を探し回る

ほとんど何も見えない
夕暮の空に

ずきんをかぶったようなこうもりが
音もなくくるくる飛び回る

ほとんど何も見えない
焼けつくほどの暑い日に
メンフクロウは
まごつきながら家路をたどる

これら三つの動物には
私のことはわからない
私も
誰かのことはわからない

ニコラス ナイ

そこにはあざみ どくむぎ すかんぼが生え
角に低いさんざしの木があった
昼間の燃えるような暑さの中で
私は果樹園の塀の上に寝そべっていた
小鳥がさえずりながら飛んで行き
淋しい気持を分かち合うものは
私には誰もいなかった
ニコラス ナイのほかには

ニコラス ナイはやせていて毛に白いものがまじり
足の悪い老いたろばだった
長生きして
ろばの寿命をはるかに越えていた
先のとがった紫色のあざみを食べ
時折身をかがめてはため息をつき
まるで「みじめなニコラス ナイ！」とでも言うかのように
首を振った

自分の影のほかには誰もいない草原で
のん気にしっぽをぶらぶらさせながら
うとうとしていた
夜明けにはよくいなないた——
それ程元気そうな声ではなかった
でも体にははりがあり
目には澄んだおだやかな光があった
時折—— 微笑んだ……
ニコラス ナイは微笑んだ

私に微笑みかけているかに見えた
角の低いさんざしの木のところから——
やせ細り 飼い主もなく やもめ暮らしでやつれていた
ひざは骨ばり 孤独で毛には白いものがまじっていた
何かは芝生を越えて行ってしまおうような気がした
濃い深い青空の下で
私とニコラス ナイのかわす言葉より
もっと素晴らしい何か

夕闇が林檎の木の枝に降りて来た
緑色の土蚩が光り
小鳥たちは巣の中でうずくまり眠っていた
私は家へ歩いて帰った
夜露の降りた暗い月明りの中で
訳もなく
幽霊のように ポストのように静かに
老いたニコラス ナイはじっと立っていた

豚と炭焼き

年老いた豚が子豚に言った
「森の中にはきのこやどんぐりがあるから

子豚よ皆んな 私についておいで
急いでついておいで！」

炭焼きがほおづえをついて
木陰に座っていた
そこへ大きな豚と子豚が
音をたてながらやって来た

炭焼きは緑の大きな木の下に座って見ていた
豚は
ブーブー ブーブー声をはり上げ
むしゃむしゃ がつがつ食べていた

おなか一杯食えると豚は帰ってしまった
星明かりの道は夜が明けず
炭焼きは ほおづえついて
心の中のくすんだ炎をじっと見詰めていた

五つの目

ハンス老人の古い製粉所にいる三匹の黒猫は
泥棒ねずみをつかまえようと箱を見はっている
ひげと爪のある猫は夜になると
五つの目をにぶく緑色に輝かせ 体丸めてうずくまる
小麦粉の袋からチューチュー 誰もいない
階段の冷たい風が吹くあたりからチューチュー
どこもかしこもチューチュー ぴよんぴよんはねる音
すると猫は出たり入ったり ぴくぴく動く
しっぽやくんくんあしらう鼻をめぐらして飛びかかる
その間やせたハンス老人は
夜が明け日が差すまで いびきをかいて寝ている
ハンスがキーキーきしる製粉所へ登って行くと

粉にまみれた灰色のねこが出て来る ——
ジェケルとジェサブと片目のジルが出て来る

しっぺ返し

魚釣りをしたことはあるかい トム ノディ？
泣いている野うさぎを罾にかけたことはあるかい？
「だめ ナニー」と口笛吹いて かわいそうなうさぎや
空を盲めっぽう飛ぶ鳥を 銃で撃ったことはあるかい？
緑の森を抜け 露に濡れた深い峡谷や
暗がりの中を殺人者のように歩いたことはあるかい？
あらゆる小さな動物が 自然の女神に
「あいつがやって来るぞ —— あいつがやって来るぞ！」と金切り声を
上げて叫んでいる時に

私はね トム ノディ きみが森をさまよひ歩いている時に
人食い鬼が宇宙からやって来て やせた顔をかがめ
きみを無理矢理家に連れて行ったら
どうなることかとよく考えるのだ

鬼は9ヤードくらいのとげのはえた塀を越え
きみを家に連れて行くだろう トム ノディ
きみは鬼の古びた鉄砲に ひぎを折り曲げつるされて
頭をぶらぶらさせながら連れて行かれることだろう

それから鬼はきみをととも冷たい
食器棚の掛け金にしっかりつるすのだ
そこで料理されるまで
きみはうつろな眼差しで辺りを見回しているのだ

大地の仲間

猫は爪のあるやわらかい足で歩く
狼は丘を足をひそめて歩く
羽をもつ鳥は 雨もよいの心地よい空で
気楽に軽やかに 高く低く飛んでいる

樫の木は 大地に柔らかい根を深くはる
ぼんやりと眠そうに 緑の頂きはそびえ立つ
王子様もまだ行ったことのない
星の王座の下で

巨人グリム

勢いよく燃えるたき火のそばに
巨人グリムは座り
厚い毛でおおわれた野の羊を
鉄串にさして焼いている
頭上では冬空がめぐり
深い闇の足下では
霧が谷間にたちこめて
村はぐっすり眠っている ——
手におえない腹をすかした犬が
高台に向って鼻を鳴らし
グリムの焼いている肉の匂いを嗅ぎつけて
赤々と燃えるたき火を見ているグリムをひそかに見張っている

夏の夕暮れ

農夫の椅子のそばに砂まみれの猫がいる
おいしい食事をねだり 膝でニャーオーと鳴く
くすんだ緑色の家に住む老犬ローバーは

骨をがりがりかじり ねずみに向って吠える
露に濡れた牧草地では
牛が暮れていく空の下で 口をもぐもぐさせながら横たわる
飼い葉おけの所では 農耕馬が干し草を引き寄せ食べている
もう一つの夏が去って行く

鍵穴

「私に骨付きの肉を焼いておくれ
骨付きの肉を かわいいスーよ」と靴屋が言った
「かかとや靴底
靴のばねや甲皮を修理する 孤独な仕事に疲れてしまったよ
板張りの壁の中では ねずみが板をがりがりかんでいる
ろうそくの上にくもの巣みたいな膜が張っている
私に骨付きの肉を焼いておくれ！」

「骨付きの肉を焼いておくれ」と靴屋が言った
「私は時計のカチカチ鳴る音を聞きながら座っていた
すると足音が戸口の方へ近づいて やんだかと思うと
あちこち手探りを始めた
私は長靴と靴型をじっと見つめていた
足は石のように冷たくなった
鍵穴からのぞいている目を見たのだよ スージー！——
私に骨付きの肉を焼いておくれ！」

古い石造りの家

灰色の屋根には何もない 褐色の地面には何もない
雨のしずくが落ちるあたりに 緑の草がほんの少しはえている
窓のところに誰もいない 戸口のところに誰もいない
かつてつけられた足跡の小さなくぼみがあるばかり
でも私は こっそり忍び足で入って行く

いらくさ 玄関 雑草が茂る井戸を通り過ぎて行く
おお 孤独そうな顔が見つめている 静かな研ぎ澄まされた目で
開き窓から 私が歩いて行くのを
じっと見つめているような気がする

廃家

夕陽が赤く燃えながら沈んでいくころ
冷たく寂しい廃家のあたりで
こおろぎが石から石へと渡りながら 鋭い声で鳴きはじめる
やがて暗闇せまる草むらに見える
妖精の群
バッタのように鳴きながら
あざみの綿毛のように軽やかに
廃家のまわりで踊っている
きれいな金色のやさしい月が
妖精の小さなどんぐりの靴を照らしている